



111号  
2006/3/1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’  
東京都町田市能ヶ谷町1521-58 田井方  
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100  
<http://wanli.web.infoseek.co.jp/>  
Eメール: [wanli@m2.ocv.ne.jp](mailto:wanli@m2.ocv.ne.jp)  
ホームページのアドレスが上記に変更になりました。



祭りの供物を持ったギャロン・チベット族の婦人。山中の集落では今でも古くからの祭りが継承されている。(四川省丹巴県) 大川健三氏撮影

‘わんりい’111号の主な目次

北京雑感その2.....	2
媛媛来信 [21]・「春の話」.....	3
中国を読む [30]【日中はなぜ分かり合えないのか】	3
黄土高原来信第二部「陝北女娃娃」3 欢琴 .....	4
松本杏花さんの俳句.....	5
活動報告・馬頭琴の話と演奏の会 .....	5
香格里拉(シャングリラ)を求めて .....	6
「雲南省うどん(米線)の旅-1」 .....	8
ラオスの山からだより VIII.....	10
ラオスの村での図書館建設記 .....	10
チベット族の聖なる山・四姑娘山 .....	12
アフリカとの出会い7・なんで動物見たいの?.....	14
‘わんりい’新年会報告 .....	16
‘わんりい’掲示板.....	17

♪♪ 笑顔が美しくなる ♪♪  
「中国語で歌おう会」 会員募集中!



3月の講座 3月17日(金) 19:00~20:45  
麻生市民館・視聴覚室(新百合ヶ丘駅下車北口3分)

- 3月は1月の練習曲の復習:「小草」(歌劇「芳草心」より)と「摇篮曲」(ブラームスの子守歌)
- 指導: 趙鳳英さん(中国四川省出身歌手)  
\*参加の方は録音機をお持ち下さい。
- 問合せは、上記‘わんりい’事務局へどうぞ

今回は、北京の人々の食事のお話をしましょう。北京には、多くのレストランがあります。日本も決して少なくないとは思いますが、北京の多さにはかなわないでしょう。繁華街の立派なレストランや、表通りのそれなりのレストランも目に付きますが、日本と違った感じがするのは、路地裏や、バス停の傍などに、ほんの小さなスペース、三畳ほどのスペースでもテーブルと椅子を置いて食べ物を提供している食堂が特に多いことです。

日本でも、住宅地が新しく来ると、先ず食べ物屋さんが出て、それを核として、後からその他の施設が集まって、町の中心を形成するようになりますね。北京では、新開地でなくても、昨日まで物置になっていたような小さなスペースでも、突如食堂が出来ることがあります。私の見聞した中では、「清華西門」バス停のすぐ脇に小さな、みずばらしいお店があって、ちょっとした包子や油条を売っていたのですが、半年程後に行くと、プラスチックのいすとテーブルを置いて、揚げたり蒸したりしたものをその場で食べさせるようになっていました。そしてまた半年後、テーブルをふやして、お世辞にも小奇麗とは言えないまでも、初めて見た時と比べると、体裁も大分整って、食堂らしくなってきました。北京には、こんなお店がたくさんあります。本当に思いがけないところに、食事処があります。

このような食事処は朝食時に繁盛します。中国の人々は、朝早くから活動を開始しますので、その人たちが朝食をとるのがこの様な食堂です。朝は何時ごろ開店するのか聞き漏らしましたが、夏の朝6時頃、私自身この様な店を利用したことがありました。そのときの印象では、その時点で始まったばかりではなく、遅くとも5時には開店しているようでした。どんなものを食べさせるかと言うと、何種類ものお粥、豆乳、油条、饅頭、ワンタン、包子、餅、肉餅、豆腐腦、ゆで卵、副菜としての漬物などです。

お粥は、勿論店によって異なりますが、私が利用した店では、大米(米)、黒米、小米(粟)、緑豆、玉米(トウモロコシ)がありました。大米は普通のお米、黒米は本当に真っ黒なお米でちょっと香ばしいもの、小米は粟で、やわらかくとろとろに煮込んであります。緑豆は、緑色で極小さな豆、青豆の五分の一程の大きさで、煮ると煮汁は緑ではなく、薄い小豆色になります。初めは、乾燥している時と煮た時の色の違いが信じられませんでした。この豆は体の熱を取るのに有効だそうで、中国の人はよく利用します。玉米は、トウモロコシを粉にしたものだったり、細かく砕いたものだったり、その時々で違いますが、中国の人々は、雑穀が体に良いと考えて、お米以外のお粥をよく食べます。

因みに、お粥は、中国の人々にとって食べるものではなく、飲むものです。動詞は、吃<sup>chi</sup>\*ではなく、喝<sup>he</sup>\*を使います。家庭で朝食をとる時も、私などはお粥があればそれが主食と思ってしまいますが、中国の方は、必ず饅頭とか餅と一緒に食べます。私は、家で朝食をとる時は、饅頭が好きで、醬豆腐をつけたりしてお粥と一緒に食べていました。(\*吃：食べる。 \*喝：飲む)

話を食堂に戻しましょう。中国の人々は、飲み物としてお粥か、豆乳をよくとります。一緒に食べるものでは、油条が人気です。油条は、小麦粉を練って、油で揚げただけのものです。私は初め、朝から揚げたものではしつこすぎると敬遠していました

が、食べ慣れると、油はあまり感じないで、お粥と良く合うと思うようになりました。饅頭(まんとう)は、食堂の朝食としては選ぶ人が少ないようですが、家庭では他におかずがあると食べ易いでしょう。リヤカーに積んできて、美味しいと評判の饅頭を売る人の前には毎朝行列が出来、8時半前には売り切れてしまいます。饅頭は、日本で言う肉まんの皮だけで中身がないものですが、美味しいものは、噛めば噛むほど味がでてきて、シンプルなので飽きが来ません。

ワンタンは、日本で食べるのと同じようですが、ワンタンの数が多く、スープはあっさりしています。ワンタンはボリュームがあって、午前中十分に仕事出来るだけのエネルギーを取れるようです。包子は、日本で言う肉饅頭ですが、三分の一くらいの大きさです。これも、店によっては、中身の種類を色々用意して、好きなのが選べます。餅は、小麦粉をこねて、細長く伸ばして蛇のトグロのように巻いて上から押さえて平らにしたり、パイ生地のように何層にもなるようにしたりして、直径10センチほどの円形にして、たっぷりの油で焼いたもの、肉餅は、同じような形態ですが、中に肉が入ったものです。

豆腐腦は、薄く葛をひいた汁の中に絹ごし豆腐が泳いでいる、と言うよりは豆腐の方が勝っていて、豆腐のあんかけのようなものです。豆腐が喉をつると通って、朝の食事としてはなかなか良いものです。あとは、ゆで卵。店によっては茶卵を置いているところもあります。そして、以上の品のどれかを注文すると、これまた6~7種類ある副菜の内から好きなものを2種類選んで無料で付け合せてもらえます。これはザーサイだったり、土豆絲(ジャガイモの千切り)だったり、こぶの細切りマリネだったり、セロリと大豆・にんじんのマリネだったりバラエティーに富んでいます。

この様に種類も豊富ですが、何と言っても魅力はそのお値段です。大抵1品1元以内で、3~4品頼んでも、一人前3元程で済んでしまいます。朝食を外で食べるのは手軽で良いけれど出かけるのがちょっと億劫と思っていましたが、慣れてくるとなかなか良いものだと思うようになりました。中国の方々は、昔の習慣の名残でしょうか、朝早くから気軽に外に出て、たっぷり朝食をとっています。

外食での朝食はこの様にしてしっかり摂れますが、家庭での朝食はかなり自由です。勿論、家庭によって、個人によって違い、私の知人の朝食は、クッキーと豆乳だったり、饅頭に醬豆腐とお粥だったり軽いものが多いようです。その代わり昼食をしっかり摂ります。家庭で調理する時でも、ふんだんに野菜を使い、夕食の様なりッチな食事を用意します。以前、「中国は、全世界の野菜の60%を消費する」と言う話を聞いて、信じられなかったのですが、調理の実際を見ていて、「あの話は本当かもしれない」と思うようになりました。

今、北京でテレビを見ていると、菓のコマーシャルを多く目にします。人々の話題も健康に関することが多いようです。始皇帝の昔から、不老長寿に関心のある中国です。毎日、市場に溢れる野菜と、台所で消費される野菜にも、中国の健康志向を感じます。北京の人々の台所を覗いて、「やはり中国の食文化は世界に冠たるもの」との印象を強く持ちました。



今年も2月4日は立春の日でした。

立春になれば、冬が過ぎ、春が来たと思われませんが、中国の北方地域はまだ寒い時期です。農業を中心としている中国では、立春が一年間の農事を始める重要な節気で、古来最も重んじられ、色々な盛大な祭りが行われたのです。

民間では「立春」に関わるさまざまな言葉も伝わっています。「迎春」、「報春」、「打春」、「咬春」、「探春」などなどがそうです。これらの言葉から昔の人々が春を迎える喜びの様子が伺えます。

◆「迎春」 昔の重要な祭りで、天子から庶民まで参加します。周の時代、立春の日に、天子自ら三公、九卿、諸侯、大夫を率いて、東の郊外に行き、東の神である、春のことを司る句芒神を迎え、一年の豊穰を祈ります。

◆「報春」 立春はいつも旧暦のお正月前後になります。この時期になりますと、民間では「春官」という役に扮装した人が、春に関する言葉や、目出度い言葉を歌にしたり、赤い紙に書いたりして、各家々に行き、歌いながら、赤い紙を差し上げて、春が来た喜びを伝えます。

◆「打春」 周の時代に、泥の牛を以って、寒気を払うとい



う冬の行事があったそうですが、漢の時代から、この行事は立春の日に行われるようになりました。土牛を春牛と言い、人々は牛を綺麗に飾り、牛に向かって礼をし、それから鞭で叩きます。それが「鞭春」「打春」のいわれで、耕作が始まるという意味なのです。

◆「咬春」 昔から立春の頃、蘿蔔(大根)、韭、芹など辛味の生野菜を食べる風習があります。それを「咬春」と言います。春風や、野草と野菜の生命力を身に受け、病疫を払い、体の健康を願うと考えられます。今、私たちは立春の日に春巻、春餅といって、炒めた野菜を薄いお餅で巻いて食べる

習慣がありますが、「咬春」の風習の名残と言っても良いでしょう。

◆「探春」 長い冬で閉じこもられた人々は、春光溢れる春の日に、家族同士あるいは友人同士がお互いに誘い合い、郊外へ行って、鼻で春の空気を呼吸し、目で春の景色を楽しみ、肌で春の気配を身体全体で感じ喜び合います。

以上のような春に関わる風俗は、いまま様々の形で民間に伝えられています。この世界に活力と生命力を与えてくれる春に対して、人はいつまでも感謝の心を忘れずにいることでしょう。

## 中国を読む ㉓

## 「日中はなぜわかり合えないのか」

莫邦富著 平凡社新書



「日中友好時代が終わった！」というタイトルにしたかったと著者が語るこの本は「中国がなぜ日本を嫌いなのか」を分かりやすく解説している。

「日本人は中国人を馬鹿にしている」という中国人の気持ちがサッカーの試合で噴出し、反日デモとなる。それを見る日本人は中国へいい印象を持たなくなり、それが中国へ伝わって、中国の日本嫌いが加速するという、非常に悪循環な構図ができあがっている。

では、なぜ中国人は日本人をここまで嫌になってしまったのか？ 本書から抜粋すると、①日本企業の不祥事 ②日系企業での中国人労働者の待遇が悪い ③日系企業が中国人消費者の気持ちを理解していない ④中国からの留学生や旅行者への受け入れに積極的でない、の4点。

中国もずっと日本が嫌いだったわけではない。1978年

に流れこんだ日本映画は中国人に歓迎され、品質のよい日本の電化製品は広く受け入れられた。ところが期待を裏切るように起きた品質問題、さらに対応がずさんすぎた。三菱自工はリコールしなかった理由を「中国にその制度がなかったから」と言いわけ、中国人消費者へのお詫びの言葉も記者が催促をしてようやく聞かれたという。

中国の若者も日本から離れている。以前は日本を目指していた若者たちが、今は欧米を向いている。結局、日系企業に勤めても幹部候補にはなれない、キャリアアップの機会が少ないという考え方だ。日本側も犯罪事件増加から留学生を歓迎しない向きがあり、両者の溝は深まる一方だ。

中国を旅行しているとき、通訳の女性が某有名日系企業に就職が決まっていると教えてくれた。私はとっても羨ましかったのだが、彼女は「2年間で辞める」と言う。ずるずる働いていても幹部になれないから、日本語のさらなる習得をした上で次のキャリアステップを踏むのだ。英語、韓国語、日本語、中国語を操る彼女が次に向かうのはきっと欧米の企業。自覚のない日本が、再び中国の若者に目を向けてもらう日は遠い。

(真中智子)



实个爱死人；五谷子那个田苗子，数上高粱高，一十三省的女娃哟，数上个兰花花<sup>1)</sup>好。”(女の子が生まれて、それはそれととっても可愛い。畑で高粱が目立って高く育つように、陝北の女の子は国中ですば抜けて可愛い。)私の目の前の、欢琴という小さな蘭の蕾は、何年かしたらきっとみずみずしい花を咲かせるに違いありません。

或る時、北山小学校で大勢の子どもたちが地面にかがんで文字の練習をしているのに偶然出会い、好奇心からこの勉強の様子をカメラに収めました。その頃の欢琴はまん丸な顔に、きらきらと輝く目、筋の通った鼻、ぶっくりとした口元で、それがなんとも言えない可愛らしさでした。ですから、3ヵ月後、それぞれの家に写真を届けようと思って村を再訪したとき、一緒についてきた子どもたちが目の前の女の子が‘欢琴’だよと教えてくれたときはどうしても信じられませんでした。女の子は丸顔から面長になり、私が前回写した写真を手渡すと、笑顔はまるで蜜をためた花が開くようです。

欢琴はアンケート<sup>2)</sup>に書き込むときも、大勢の子どもたちが見ている中で、落ち着いて、心を込めて自分の趣味や将来の理想とする青写真を書いてくれました。

2002年6月から2003年1月の間、私は欢琴を撮り続けてかなりいい写真も増えました。人々は私が都会から連れてきた女の子だと言いついていましたが、実は、陝北地方の村々には何処にでも、‘蘭の花’のような見目のよい女の子は沢山いるのです。人々はよく言います：“圪圪瘩瘩种出好糜子，憨老婆姨生出好女子”(荒地でいい作物が育ち、大した嫁でもないのに可愛い子を生む。日本の「鷹がトンビを生む」の例えに近い)

2003年秋のある日、私は同郷の友達を連れて伏羲河村から劉家山村へ全行程30里余(中国の1里は約500m)を歩いて行きました。全行程は山道で、谷を越え丘を登り、とうとう途中の北山村で、一緒に来た連れは我慢の限界を越え身体が言うことを聞かなくなりました。事務所ではやり詰めで、こんなに長く、苦勞の多い路を歩いたことはないので倒れ



2003年秋の欢琴

2005年夏の欢琴

この日は日曜日で、村の学校は閉まっており、子どもたちもみな家にいる筈でしたが、学校の塀の外で何人かの子どもたちが遊んでいました。近づいて見ますとその中に欢琴もいます。棗色(えんじ色に近い)地に小花を散らした、中国襟の綿

入れを着、長い髪の毛を編まずに垂らしています。背丈も幾分伸びたようで、相変わらず蜜のような笑顔で笑います。

欢琴も私を認めて、写真撮影に協力してくれました。カメラを調整し、景色を選び、黄土高原の丘をバックにして写真を撮っていますと、いつの間にか、私の隣に友人が来て、この‘オジサン’は何処でそんな元気を貰ったのか知りませんが、忙しく右に左に走り回り、跳び

はねて、“カ、カ”とカメラのシャッターを押し続けています。

撮影が済んで、琴に他の子どもたちに写真を渡してくれるように頼んで私たちは劉家山村に向って道を急ぎました。連れは人が変わったように疲れたとって喚かなくなったので、どうしたの? と訊きますと、この女の子を写せて全くよかったな一とのこと。そうです、収穫があれば、疲れもどこかに吹き飛び、元気が漲り、頑張ろうという気になるのです。

2004年7月、私は子どもたちの近況を撮影しようという目的で又でかけました。欢琴は生憎(あいにく)、お母さんと一緒に出かけてしまっていました。仕方なく(宿泊地の)劉家山村は近くの村なので戻りました。戻るとき、欢琴のお父さんに“もう少し欢琴の写真を撮りたいと思っているので、夕方、戻ってきたら劉家山へ寄こしてください。”と伝えて、前回写した欢琴の写真を渡しました。父親は“よし、分かった”と二つ返事で答えてくれました。劉家山村に戻り、太陽が山





にかかるとなるまでずっと待ちましたが、人影は見えず、丘の上に人をやって大声で呼ばせますと、向うから“直ぐ行きますよー”と返事が返ってきました。で、欢琴はやっとお母さんに連れられて来たのですが、何故か機嫌が悪く小さな口を尖らせています。お母さんが“今日は我慢を続けて歩いたので、来たくないというのを無理やり引っ張って来たんですよ…”と言い終わるのも待たず、欢琴は泣き出し、写真を撮るのはとても無理です。

暫く辛抱強く待っているうちに気持ちがどうにか落ち着いてきましたが、太陽はゆっくりと西の山に沈み始めています。村は日が翳り、しかたなく丘の上に女の子を連れて行きますと光の加減は思ったよりとてもいい感じでした。しかし、女の子の気持ちはずっと晴れず、顔をこわばらせた膨れ面のままでした。泣き腫らした目に時折涙を浮かべています。が、その様子さえ私には今回の収穫になるでしょう。私は三脚を立て、遠方撮影用の長焦点レンズを幾組か使用し撮影しました。幸いなことに美しい娘はどんな風でも美しく、怒った表情も可愛いのです。

夜、(宿で)とりとめない話しをしていると、宿主が私に語るには“欢琴の母親というのは、実は彼女の叔母さんで、本当の母親は女の子4人と男の子1人を生んだんですよ。欢琴は上から3番目で、小さなときに叔母さんのところに貰われて育てられたんですがね、大きくなって実の親のところに連れて行ったら慣れていないもので却って心細がり、そんなで今のところは戻す気持ちはなくなったようです。”とのことです。戻ることになっても親戚を訪ねる様な感じでしょう。欢琴の実の母親がどう思っているのか、生まれた女の子それぞれが蘭の花のようなのかどうかは分かりません。機会があればその村を訪ねてみたいと思っています。(田井訳)

注1) 兰(蘭)花花：陕北での女の子の呼称。

注2) 周路先生は、生年月日、家族構成、趣味と将来の希望などを書き込むアンケートを女の子たちに書いてもらっている。

▶ 冯欢琴

1994年3月24日出生

北山小学校2年生

家族：父親、母親、姉、兄

趣味：勉強

将来の希望：医者

▶ 欢琴の原文は、紙面の関係で3月号は掲載できませんでした。'わりい'HPの方でご覧頂ければと存じます。

▶ 尚、'わりい'HPには、周路先生、四姑娘山自然保護局の大川健三氏及び何媛媛の「媛媛来信」のページが加わりました。紙面に掲載できなかった写真なども見ることができます。インターネットに接続されていらっしゃる皆様の来訪をお待ちしています。

nián huā wēixiào  
松本杏花さんの俳句《拈花微笑》より

清らなる晋祠泉水春鏡

jìn cí gǔ shā jìng  
晋祠古刹静

qīng chéng quánshuǐ yīng chángkōng  
清澄泉水英长空

chūnlái rú jìng píng  
春来如镜平

一看便知，此句仍为吟咏春天的。

诗中的清静，即指古刹晋祠，也指澄彻的泉水。不仅没有喧嚣的骚音，而且亦无水面的回风。如此环境，才会使这泉水如镜面一样平，映照出斑斓春景。

【活動報告】

— 馬頭琴演奏者、チ・ブルグッドさんのお話と演奏の会 —  
草原のチェロ・馬頭琴ってどんな楽器？ どんな音色？



2006年2月19日(日)於：まちだ中央公民館

チ・ブルグッドさんは、映画やテレビなど各方面で活躍の馬頭琴奏者として知られていますが、今回は、演奏の前に、講師として馬頭琴について楽器の仕組みや演奏のテクニック、モンゴル共和国の馬頭琴と中国内モンゴル自治区の馬頭琴の違いなどがどうして生じたのかなどのお話から始まりました。

専門的な話も混ざり、時にやや難しかったのですが、今は既に使用されなくなった、牛皮やニシキヘビの皮を胴に張った馬頭琴や、モンゴル共和国の馬頭琴などさまざまな種類の馬頭琴を、実に7台も持参くださってのお話で、その後の演奏では全ての馬頭琴を弾いてくださり、音色の違いなど実際に耳にできた滅多にない貴重な体験でした。

また最後は、最近とみに力をつけ、今夏、内モンゴルのフフホト市で日本人による馬頭琴の演奏会を開催するという万馬東京馬頭琴教室のメンバー5名も加わってわたっての合奏で、満席の参加者による大きな拍手で終了しました。

尚、この講座は、ケーブルテレビJ:COMによって取材され、神奈川フォーラムのプログラムに加えられて、4月末に放映の予定です。

砂利道ながら快適な道をニュージーランド隊のBCを探しながら進んだが、見当たらず、工事人にも尋ねたがとうとうわからなかった。しかし牧場の向こう側に起立する、ムズタークタワーを彷彿させる哈速(5,524m)は見ごたえがある。近い将来必ず誰かが挑戦することだろう。

牧場周囲の山々の景観を堪能して帰路につくと、営林署のテント村から木の間に雪煙をあげた、無名の岩峰が手招きしている。圧巻である。

順調に高度を下げているとニュージーランド隊を迎えに行く四駆とすれ違う。運転手どうしは顔見知りのようだ。分岐点の食堂で遅い昼食をとっていると亭主が夏塞に入山している隊は、オーストリアではなくニュージーランド隊で登頂には成功したらしいとの情報を入れてくれた。しかし、氏名等の詳細は不明。四川登山協会によると登山申請は出されたが、名の通った未登峰にかかわらず安い許可料しかとっておらず内部でもめているようだ。

悪路を抜けて海子湖にさしかかると、行きには見えなかった夏塞がご機嫌宜しく我々に挨拶してくれていた。今日はジャーニーこと扎弄岬も容姿を惜しげなく見せ最高の日だ。すっかり日の暮れた理塘に戻り再び民宿の厄介になる。

夏にはブルーポピーが群生する理塘郊外を離れ、ミニヤコンガから海子山までの山並みの展望に期待して道を先を急ぐ。しかし、4,800mの卡子拉峠からも次の峠からもいつものように雲が邪魔をして期待を裏切られた感じ。

雅安は夏の大洪水で郊外はすっかり洗い流され、岩石の間をやっと通り抜ける状態だった。大きな鉄筋コンクリートの建物が無残な姿で川の中まで押し出され洪水のすごさを物語っていた。雅碧江の橋のところは現在高架橋を建設中だが、脆弱な地盤の上に積んだ土台はみるからに頼りなく、これとて抜本的な対策にはならないのではないだろうか。新都橋で、あまりの悪路でクラッチがおかしくなったパジェロを修理した後、逆光の海子山を見る



10月の理塘



雪に覆われた海子山峠(10月)

べく道を急ぐ。八美は開発ラッシュの街で、新しい飯店にチェックイン。

油条と豆乳の朝食後、雲の多さを気にしながら、峠を越え、少し下がった海子山北面が真正面に見えるところに着いたときは、上部半分は雲の中。今日は急ぐ旅でもないので雲の去就に一喜一憂しながら待機するうちに、北面がやっと8割が見えるところまで回復してくれ感謝感激、フィルムに収める。

大金川と小金川が合流して、大渡川になる丹巴からは、日本人も殆ど入ったことがないだろうと思われる革什扎河を遡って党嶺を往復する予定で再び悪路との戦いが始まった。この流域の居住者はこの地方に多い羌族ではなく、裕福なチベット族で、白壁の家の上に家内安全を祈願した三角形の突起を出した独特の建築物の集落を形成している。まるで、西洋のお城のような華麗さだ。

しかし、侵略の歴史を物語るように、村の中心には見張り用の古い塔(石硯)が建っている。がけ崩れの修復工事のため待機などあったが、辺りの紅葉に目を休ませながら、夕刻党嶺の民宿に到着した。ここは丹巴県から模範民宿の認定をうけた家族経営の立派な民宿だ。

集落にはお寺と十数軒の家がある。夜は、交歓会をやっ



党嶺のチベット民宿の前にて



ているうちに三布からやってきたガイドや集落の民族衣装の美人たちと酒盛り歌合戦になってしまった。朝焼けの聲に、多少頭痛の残る身を励まし寒空に三脚を据え紫煙を燻らせていると、周りの寒気が体中に浸透しとても我慢が出来ず、カメラを放り出して炊事中のストーブに駆け寄るほど寒かった。凍結で、昨日は四度も落馬した人もいるから気をつけてと言われながら、部落から調達した馬の鞍に跨る。遠くに白菩薩の白い山稜を見ながら、牧場を過ぎると傾斜はどんどんきつくなり、峠へ一時間程のところで(3800m)この先は歩けと馬から下ろされてしまった。生意気な馬方と烏里烏沙さんが大声でやりあうが彼らは梃子でも動かない。

ここから1時間上って峠を越すと、another 香格里垭かもしれない瓢箪湖に着くはずだが、体調が思わしくない私はここで断念し、烏里さんだけが民族衣装に身を固めた美人を供に上って行った。後で聞いた烏里さんの話では、瓢箪湖のさらに奥に神秘的な湖があり、そこを目指したが道に迷い断念せざるをえなかったようだ。

帰路、丹巴に近づくといく5000m峰の手前に、町からは見えない丹巴富士が見えてきた。小金の街をとばして沃日の橋のところまで来ると、運転手が車を停めてどこかに行ってしまった。橋の向こう側には、漢民族風の屋根がある古い建物のそばに石硯が建っている。やがて運転手はこの町の特産である林檎を買って戻ってきた。烏里さんの話では中国で一番大きな林檎が出来るのは措普溝の先にある巴塘だが、大きいだけで味は悪いが香りがとても良いので人々は食べずに家の中に置いて香りを楽しむのだそうだ。

日隆から巴朗峠に向かって少し上がったところの展望台は、正面に四姑娘山、左に挟金山系が展開し我々の足を完全に停めてしまった。何しろ何時も天候に意地悪され拝顔の機会がなかった四姑娘山が目の前で微笑んでくれるなんて何という幸せだろう。しかも峠の上からは四姑娘山の東に展開する幻の山々が姿を出しているではないか。鋭いピラピッド型の岩峰がいくつも聳えまるで絵を



党嶺のチベット民居



東方のアルプス・四姑娘山(標高:6250m)



巴朗山峠(4523m)からの展望



カムの男と丹巴美人

見ているようだ。旅の最後にこんな貴重な写真が撮れるなんて俺の運命もまだまだ捨てたものではないと心中心微笑んだ。

成都に戻ると、生憎どのホテルも満杯だ。しかし、烏里さんの尽力で、日本人では私が始めてであろう、チベット高等裁判所成都事務所の幹部宿泊所に泊めてもらうことになった。部屋は四星ホテル以上でご満悦。夜は私の朋友の泊まるケンピンスキーホテルまで制服の武装警官が運転するパトカーで送ってもらう。現地の日本人間で特に人気のある飯店で選んでくれた特別料理に日本から持参の安蔵院焼酎で乾杯を重ねた後、カラオケで夜半まで成都最後の晩を楽しんでから、香格里垭の夢の世界へと入っていった。(写真は全て烏里烏沙氏撮影による)



## ▶ 米線のたのしみ

2005～06年にかけての正月旅行は雲南省南部だった。同行のメンバー7人は、ほとんどが会社勤めなので、長期休暇がとりにくいという悩みがあったが、烏里烏沙さん(チベット高原初等教育・建設基金会理事長)に旅程の組み立てなどご尽力、同行いただき、楽しい旅ができた。

今回の目的は、壮大な「棚田」見学と、華麗な民族衣装の「花腰傣族」訪問だった。

中国の棚田はこのごろテレビや、雑誌の写真で見かけるので、もはや「秘境」ではない。私は棚田も観たいが、棚田を含む雲南省南部の風土も観たかったのでこの小旅行は、ちょうどよい機会であった。

以前ベトナムのハノイへ観光で行ったときに大河「紅河」を観た。レンガ色の水がハノイ近郊の広大な水田を潤している。この河の源流は中国雲南省だ。雲南省南部のどんな谷を流れるのか、紅色の水はどうして? などと、いろいろ興味をわいたが、今回観られて嬉しい。

雲南省旅行の楽しみは、米線という、ビーフンのうどんが食べられることだ。のどごし、味とも良く、ツルツルと食べられる。茹であがった米線に白いスープをかけ、挽肉を辛く炒めたものや、現地独特の香辛料、香菜などをのせて食べる。自分で辛みや具を調整できるので「辛み初級」の私でも安心だ。店によってこの過程の段取りが客の自由にならない場合もあるが、そのときはそれでよい。当然だが店によって少しずつ味が違い、それも楽しい。難をいえば「味の素」をひかえてほしい。

## ▶ バスに揺られて

12月31日9時、昆明の金泉大酒店を出発。この日の泊まりは棚田の見学の足場となる街「元陽」だ。「紅河哈尼族彝族自治州」にあり昆明から南方約300キロにある街だ。提携先の「雲南熊猫国際旅行社」から派遣された、若い(30歳代か)丁さんと、バスのオーナーで運転手の小柄な宗さん、が旅の道連れだ。バスは19人乗り、中国「金竜」社製、まあまあこざれいであるが南国仕様で、暖房はない。

昆明の街は日本の街に比べれば路が広くゆったりしているのだが、急激な車社会に追いつかず、高速道路に乗るまでが大渋滞で無駄な時間をとられた。車窓から観察すると、幹線道路に歩行者用の信号などあまりないので、年寄りなど普通の生活に不便であろう。荷馬車が立派に現役で、長いまつげの馬車ウマが首を振り振り駈ける姿を観ると、「がんばれや」と応援したくなる。ウマは、排ガスをあびながら車の間を消え去った。

高速道路に入ると葉物の畑や、野菜を作るビニールハウスなどが続き、車窓がみずみずしい。咲き始めた菜の花畑もある。バスは高みを走るので見晴らしがよい。しばらく進むと、右手に空を写して青い湖「滇池(昆明湖)」が遠望できた。湖畔に断崖を架けて盛り上がる名勝「西山」が青くかすみ景色は箱庭のように美しい。滇池が汚染された湖として名高くて、遠目には絵のよう

である。

高速道路でも、「高速」で走れない車もある。積載オーバーと思われる大きなトラックで、喘息持ち肥満のオバサンのように、よたよたと走る。普段でも煙幕のような黒煙を吐くが、登り勾配では息切れして、路肩に止まっているのをちょいちょい観る。これらの車を追い抜くとき、高速道路は追い越し車線があるので、対向車の心配が不要なのがよい。雲南省南部は広い高原状の台地で、そこをたくさんの河が谷を作った。道路はその谷を幾つも横切るため、長い坂が多い。休み休みでないと走れないトラックが多いようだ。

高速を下りて「通海」へ行く途中で、猛烈な交通渋滞に遭遇した。あとで通り抜けるときに観たのは、交差点の信号が点いていなかった…と、交差点の中でトラックと乗用車の接触事故があったこと、であるが渋滞中のでたらめぶりは傍観者としては面白い。片側1車線で流れるべき道路が、運転者の自己都合で自由対面道路になってしまった。道路に沿って排ガス、ホコリが巻上がっている。われわれのバスは、小刻みに動くうちに、巨大なトラックに左右を挟まれ、身動きが取れなくなった、困ったなあ。乗っているバスは、もつれた車ダングの一台に加わり、じっと止まったまま渋滞解消を待つ。

かなり時間が経過してから、嬉しや、交差点に交通警察官が3人現れる。続いて職務を遂行。猛獣をしつける調教師のように腕を振って右、左の車に指図する。するとどうだ、固まった氷のブロックをお湯で溶かすような具合に、車のもつれを次々とほどこいた。なーんだ、やればできるのじゃないか。

昼食の後、またバスに揺られる。道路は山越えの地形になり、別の谷に入った。まわりの景観は、大陸的でゆったりしている。1月といえども低緯度、日差しは暖かい。土地はラテライトと呼ぶレンガ色の土壌が基調で、痩せた土地だ。植生は貧弱で、天然林はほとんどなく山野はすべて人の手が入っているように観えた。

## ▶ 土砂崩れ

峠を越えてから、小さな谷に沿って下った。そして眼下に大きな河、紅河(地物名は元江)に突き当たり、河岸の縁に出る。それから左岸の谷筋を下流に向かって走る。紅河の水は



紅河(元江)と崩れた道路。すぐ下流にダムがあり流れが止まっている。



名前のようにレンガ色である。

突然、路面の舗装がなくなってガタガタになり、土砂崩れの現場に出会った。バスは止まった。行く手の法面が連続的に崩れて陥没し、通行不能になっていた。すぐ先で道は二股になり、一方が土砂崩れ現場へ、もう一方は復旧用仮設道路に行く。復旧仮設道路は、崩れた本道路と平行した上方斜面を切り開いて敷設してあった。仮設道路の進捗ぶりからすると、土砂崩れ発生はかなり以前と推測するが、関係する接続地点に「道路情報」というものは出さない。崩れた現場にきてから初めて「困った」ことが分かる仕組みになってのは本当に困るね。

ここまで来ると、もうすぐ今日の宿「元陽」はすぐだ。土砂崩れ現場を避けて、別の経路をとるのは現実的ではない。丁さんが車を降りて土木工事中の作業員に様子を訊きにいった。彼がバスに戻ると、進んでも良いだろうということで、おそろおそろ出発。道幅はある程度広いのだが、ブルドーザーで削り取ったままといった有様。大石がごろごろして、車が通った痕跡のあるわだち以外は通れない。そして、そこはなぜか道路端の崖際ばかりなのだ。対向車よ来ないでくれー。最減速して慎重に走行したが、ときおり床下になにやらゴトゴト当たる音がして、気持ちがわるい。碎石を乗り越えるときに大きく横揺れすると、弾みで路面から飛び出して紅河に転落するかと思った。

路幅に余裕のあるところで、荷台のベンチに子供らを満載した小型トラックとすれ違った。学校帰りのスクールトラック(バス)のようだ。子どもらは怖がっている様子はなく、笑顔で手を振る子もいる。彼らにとっては日常的な通学路なのだ。

やっと悪路を抜け出してから、紅河に架かる橋を渡り、対岸に出て右折、元陽の街に入った。商店が街道沿いに続き、間もなくホテルに着くぞと思った。しかしバスは街を行き過ぎてしまった。



元陽「新街鎮」のあけぼの、長大な尾根の上に街(写真左側)がある。

街はずれの修理工場で停車し、バッテリーを直すことになった。悪路での振動のせい、配線に不具合ができたようだ。全員下車して、足腰を伸ばしたりする。近所に気の利いた商店でもあれば、退屈しないのだが、殺風景な町工場ばかり並ぶ限界で残念。修理に1時間ほどかかった。

#### ▶ホテルのある「新街鎮」へ

バッテリーを直して出発。すでに夕闇がせまってきたが、まだホテルに着かない。元陽の街からホテルまではごく近いのかと思ったら、とんでもない。ホテルの位置は、元陽県の「新街鎮」というところで、元陽とは別の街だった。すでに暗くなった山路をエンジン音やかましく、蛇行して高度を上げる。次のカーブを曲がればホテルのある街、「新街鎮」の明かりが見えると期待するが、幾度も期待はずれた。しかし、ついに行く手の闇上方に、小さな明かりの点がたくさん現れた。日本の街のように、ネオンやけばけばしい色彩はない。小さくひかえめの、暖かい街明かりだった。7時45分ホテルに到着。

荷物を部屋に置くと、すぐに夕食で、近くの郷土料理店へ歩いて行く。美人女将がとり仕切る、ウリさんのおなじみらしい店にはいり、腹を満たしてくつろぐ。この日はバスに乗り疲れ、ホテルへ戻ると、すぐに寝てしまった。

明けて31日、6時30分。市中見回りの散歩にでた。まだ暗いが、街は活動を始めていて行き交う人々がいる。网吧(インターネットカフェ)から出た、男女の若者がぞろぞろ行き過ぎる。終夜営業の終了か。雲南の岳都も、インターネットの波にさらされている。

7時をすぎるとようやく明るくなった。前夜は暗くて分らなかったが、街並みは長大な尾根筋の中ほどに、こびりつき、山肌にできたおできみたいだ。街の展望台からの眺望は見事だ。遠くの山々は朝日に洗われ、眼下は雲海が蠕動して、海に突き出た半島からの眺めのような。あとで訊いたところによると、街の標高は約2000mもあるそう。



傾斜地に建つ元陽「新街鎮」のたたずまい。

▶続く

久々の、ラオスの山の村からの報告です。12月は霧で太陽が見えない寒い日が続きましたが、最近はややく暖かくなりました。といっても、山から引いてきている水での水浴びはやはり冷たくきつい日もあります。それ以上に、乾季なので水が不足していて、水浴びするのは週に1~2回。人々は畑の準備で忙しくなっています。今はトウモロコシ畑。焼き畑といっても、今は森の木を切り倒して焼くわけではなく、昨年使ったトウモロコシ畑を焼くのです。真っ黒に焼かれた畑を耕し、そして、雨が降り始めたら、種をまくそうです。

さて、図書館建設ですが、つい数日前、やっと材木の一部が村に届きました。注文してから約2ヶ月……材木といっても、製材した木を売っている店があるわけではなく……郡の役所に申請して、伐採許可を出してもらい、自分たちで欲しい木が生えている村を探して、そして、村の人々に頼んで伐ってもらうわけですから、簡単ではありません。最初役所からその話を聞いた時には、もう、深い霧の中で立ち往生しているような気がしました。何とか人を介して、村の人たちに頼んでもらうことができましたが、村の人たちが森の奥深くに行くと、斧で木を切り倒すことから始まるのですから、材木一つ手に入れるのも時間がかかるし、寸法通りにも仕上がってこず、日本とは大違いですが、材木一つ手に入れるのだった、私たちは本当に自然に依存して生きているのだということをおぼろげに思わざるをえません。

基礎を作るために必要なセメントと砂は購入しましたが、砂利も購入しようと言っていると、村の人たちは、「石なんて、山にはいっぱいあるんだから、買う必要ないよ。取ってくればいい」と言うのです。てっきり、河原から拾ってくるのかと思ったら、そうではない。鉄の棒を持って、山の岩をガンガンと割って、それを持ってくるのでした。そして、それをトンカチで割って砂利にする。しかも、その作業は村の女の人たちが率先してやってくれました。人間の力ってすごいなあ……と思ってしまいました。もちろん、機械があれば、山も岩もどンドン崩せるでしょう。でも、彼らは自分の手しかないのに、それでも、石が欲しければ、平気で岩に立ち向かう。砂利にしたければ、叩いて割る。

きっと、そうして一本一本、斧で木を伐り、そして、岩を掘り起こし、割って石にして……一人一人が自然と立ち向かいながら暮らしているうちには、きっと自然のバランスだって、そうは崩れないのだろうな……それが、木が金に換わり石が金に換わる……となると、どンドン木が伐られ、崖が崩されて……自然のバランスがどンドン崩れていく……そんなことをこの村にいて思います。

というわけで、図書館ができるまでにはまだまだ時間がかかりそうです。でも、私たちもいちいち戸惑ったりイライラしたりしながらも、一段階ずつ重ねていく。そんな経験ができることは、本当に貴重なことだと思っています。

### ラオスの山の村での図書館建設記

鈴木晋作

今年度は、村での「文庫」活動の最初の1年。まずは、小さい村での小さな拠点作りから始める。先ずはこの村で生活を始めることである。文庫は、建物の在り方、作り方、実際に作ることまで関わりと云う。もしかしたらとてもお節介な活動かもしれない。

2005年の12月に実際の建設準備は始まり、材木が到着するまで、村では壁を作る「竹・わら・土」の準備をした。村の人々も忙しい中、多く参加してくれて、こちらとしては「うれしい」誤算であった。今回は、村の人達の顔や生活、材料や建築方法を知り、試行と実践を経て、管理棟(活動準備小屋、つまり、モンの人々が集まったり、日本からの訪問者が寝泊りできる小さな「家」)を村の人で、建設し、次回(来年?)の図書館本棟(……と言っても、これまた小さい。およそ70平米強)の建設に備える。

ともかく、この村に生活を移し活動することが出来なければ、何も始められないのである。今年1月は、基礎工事を始め、ようやく本格的な「建設」となった。実は1月は、結婚式や先祖への儀式、病人に魂を呼び戻す儀式が多く、実際には合間に工事を行っているようなものであった。こちらで工程計画

を立てて、工事日数と人手を見込んでも、その完了の期日は読めないのである。モンで余所者が入って「自力建設」をするのは、想像以上に時間が掛かることなのだ。

しかし、だからこそ試行したり、適切な材料を探したりができるといえる。そうやって過ごす時間の中で、我々は何かを発見するのであり、一方、村の人々はこの場所に積極的に関わられるようになり、それが今後の文庫活動に繋がって来るのだと思う。今は、その「種まき」もしくはそれ以前の「土作り」だと言えようか。それを、信じてか、小さな家作りに時間をかける日本人は、気楽なものだと思ってか、村の人々も、「ゆ〜っくり作りなさいよ」と言ってみ守ってくれている。

#### ●モンに一人滞在

安井さんが、日本に一時帰国し、モンに初めて一人で滞在することになる。初めはどうなることかと思っただけ、かえってそれがいい経験になった。

村にいる限りは意外と、とりわけ困ったことはなく、むしろ、ピエンチャンに戻ったときのほうが、ラオス語が分からなくて不都合が多い。村に1ヶ月以上も滞在すれば、モン語も簡単なことなら分かる。それよりも、一人でいたことで、村の



人が直接語りかけ、ぼくに分かるような語り方をし、何度でも話してくれるようになったし、僕の話の間こうという姿勢もできたことは大きい。村の中なら意思の疎通がはかれるようになったといえる。

実際、隣村に平らな石を探しに行った際にも行き違いがあった。必要のない石まで運んでしまう破目にあい、「高い買い物」をしてしまったのだ。何度も説明しても、良く知らない外国人の話には「耳を傾け」てくれないのである。以下、写真と解説で建設と村の様子を振り返る。



### ▶ モンの墓造り 1月24日

村人が協力し、墓造りをする。マメ科の堅木で作った棺おけをレンガとコンクリートで覆う。昔、中国から移動してくる以前(清朝)に、戦乱で墓を暴かれた民族の記憶がそうさせるのかどうか分からないが、畑のど真ん中に巨大なセメントの塊が出来上がった。

天板は、日本でも戦時中に流行った「竹筋」コンクリートである。鉄筋の変わりに竹を組んで、引っ張りに耐える。おかげさまで、もちろん図書館の基礎工事は停まる。



### ▶ 基礎工事—地業(地面掘削) 1月20日

共同作業は、村のグループごとに参加義務がある。でも実際は、すぐ帰ってしまう人や、市場に行ってしまう人、座ったままの人もいて、その人の意識に関わっている。子どもを脇に座らせた力強い「母」の働きが絶大。



### ▶ 基礎工事—基礎石積み 1月28日

基礎工事。手前の低い基礎は、かまどの穴。向こうにあるのは、共同作業で作った材木小屋。作業を村の長老達が、見守っている。翌日、基礎工事は完了。



### ▶ 隣村に石探し 1月30日

お世話になっている家のサイガウ爺さんと平たい石を探しに隣村に行く。

70代後半とは、とても思えない動きぶり。茂みを切り開き、断崖から石をポンポン放ってくる。



### ▶ 竹木舞の土壁のついたて試作

村の竹とわらと土で土壁のサンプルを作り、強度・割れ・作業性を見る。子どものお守りをしながら、2日がかりの仕事になった。



# チベット族の聖なる山・四姑娘山 その2ー楽しみ方

大川健三 (中国四川省四姑娘山自然保護区管理局)

さあ、皆さんは、成都から、バスや車で四姑娘山の登山の起点・海拔3,200mの日隆に着きました。水と緑に恵まれた四姑娘山自然保護区でなにをされますか？ キャンピングとハイキングによる山歩き？ 花畑や海子巡り？ 峠からや溪谷での風景観望でしょうか？ 四姑娘山自然保護区紹介の2回目はキャンピングやハイキングの見どころなどをお知らせしたいと思います。

## ▲海子溝

海子(海子は、日本語の湖沼にあたります) 溝は四姑娘山主峰の南東側に広がる緩斜面の草地が多い溪谷で、特に野生植物が多い所です。山上には多

くの海子が有り周囲の山々を映します。

## ▲鍋庄坪

日隆から近く、四姑娘山主峰の南面を一望できる丘です。仏塔が有り、チベット族の宗教的な祭りが毎年開かれます。稜線を4100m位まで登ると、長坪溝の中流域を一望できます。

## ▲老牛園子

大姑娘山や二姑娘山に登ったり、大海子や花海子や八角棚海子を歩いたりする時のBCです。大海子は四姑娘山最大の海子で、南側の海子山等を映します。花海子は沼が点在する湿地で、東岸から四姑娘山主峰の南東稜や南側の小溝氷河、三姑娘山の東壁が見えます。老牛園子の東岸上部を登ると、四姑娘山主峰や大姑娘山やプニュー一溝の山々を映す八角棚海子が有ります。花海子から犀牛海子の方向にさらに足を伸ばすと密生した花畑が美しい大黄棚子が有り、南岸山上には大黄棚海子が有ります。

## ▲犀牛海子

四姑娘山主峰の北東壁を映す海子です。周辺に多種多様な花が咲きます。上犀牛海子からさらに登ると臥龍へ出る峠に出ます。初夏、暑さを逃れてヤクが峠を越えます。

## ▲双海子

海子溝最奥に在る海子で、直下に大きな滝が有ります。さらに登って鞍部に出ると、谷底から高度差2500mで突き上げる四姑娘山主峰の北東壁の全貌が見えます。



鍋庄坪から見た四姑娘山主峰



四姑娘山主峰東北岸壁と犀牛海子

## ■行程と海拔高度 (概略値)

\*行程は徒歩による所要時間で短時間の休憩時間を含みます。

日隆 3200m-1.5H → 鍋庄坪 3600m-2.5H → 老牛園子 3800m-1H → 大海子 3800m-0.5H → 花海子 3800m  
花海子 3800m-1H → 大黄棚子 3900m-1.5H → 右溝の滝上 4200m-0.5H → 下犀牛海子 4300m-0.5H → 上犀牛海子 4400m  
右溝の滝上-2H → 双海子 4600m

## ▲長坪溝

長坪溝は四姑娘山主峰の西側に広がる急峻で森林が多い溪谷で、特にアルプス的な風景が素晴らしい所です。この溪谷には発達したU字谷が多く隆起したフィヨルドの様に見えます。山上には多くの海子が有り岩峰群を映します。

◆ラマ寺：日隆から自動車です5分の所に有るラマ寺跡が出発点です。長坪溝の西岸に沿って枯木灘まで栈道が有ります。枯木灘の手前で吊橋を渡り東岸へ移ります。

## ▲枯樹灘

中州と水没林が有ります。西岸に幾つもの滝が有ります。東岸に沿って木驢子へ至る道が有ります。途中の両河口から西岸のプニュー一溝周辺の尖鋭な山々が見えます。プニュー一溝源流には海子が有ります。

◆木驢子：広い草地と沼が点在する湿地が有ります。四姑娘山主峰の北西壁を間近で仰ぎ見る事が出来ます。周辺を山歩きする時のBCです。周辺には羊岡子溝やプニュー一東壁基部、源流には海子を持つチュイン溝やチュプ一溝や小溝、氷河と臥龍へ出る





木驢子風景

峠が有る長溝、長坪溝が流れを東から南へ変える長坪崖穴が有ります。東岸沿いに卡子溝へ至る道が有ります。途中の羊満台溝を登ると氷床や海子が有り、臥龍へ出る峠も有ります。羊満台から四姑娘山主峰の北西壁や周辺の岩峰群を見渡せます。卡子溝出合いの直ぐ手前に、色爾登普山を映す広い湿地の広河原が有ります。

◆**卡子溝** ka zi gou: 理県へ出る峠が有ります。卡子溝を登らずにさらに東岸沿いに進むと、西岸の倒溝出合いを経て溝尾に至ります。溝尾は長坪溝最奥に在るカール地形の底で、直下に大きな滝が有ります。色爾登普山等の周囲の岩峰群を眺められます。

■行程と海拔高度 (概略値)

日隆 3200m-車 5分→ラマ寺 3400m-1H→枯樹灘 3500m-2.5H→木驢子 3700m-1.5H→長坪崖穴 3800m-1.5H →叉子溝出合い 3900m-2H→溝尾 4100m

■**双橋溝** shuang qiao gou

双橋溝は長坪溝の西隣に有る氷河起源の地形の渓谷で、自動車道路が走りアプローチが楽な所です。

◆**人参果坪** ren can guo ping: 6月に桜草が一面に咲きます。双橋溝の東岸に沿って撵魚坝まで栈道が有ります。

◆**撵魚坝** nian yu ba: 中州と水没淋が有り、周囲の山々を映します。降雨が多い夏には湖が出来ます。

◆**大草坪** da cao ping: 西岸の広大な草地斜面 3700m ~ 4300m で、斜面上部の草が尽きる所に海子が有ります。海子の北側の丘から双橋溝上流の山々を眺められます。谷底から岩壁が聳え立つ尖子山 5472m、巨大な城壁のような色爾登普山 5592m (別名 野人峰)、下部に氷河を抱えた尖鋭なピークの阿妣山 5694m や玉兎峰 5578m 等です。

■行程と海拔高度 (概略値)

日隆 3200m-車 1H→登り口 3700m-徒歩 3H→大草坪海子 4300m

◆**鹿耳冲塘** lu er chong tang: 双橋溝の最奥に有るカール地形の底で、5000mを超える周囲の岩峰群を眺められます。理県へ抜ける2つのルートの分岐点でも有ります。

■行程と海拔高度 (概略値)

日隆 3200m-車 1.5H→双橋溝の終点 (紅杉林) 3800m-徒歩 1.5H→鹿耳冲塘 4200m

なおキャンピングされる場合はテントや炊飯器具を持参するようお勧めします。渓谷の中や山腹に多くの放牧小屋が有りますが自由に使えません。一部の小屋で宿泊や食事が可能ですが環境は良くありません。これらの小屋をご利用される場合は予め日隆で確認して下さい。

■登山と山歩きについて

四姑娘山主峰 6250m は、1981年7月に同志社大学隊が南東稜から初登頂しています。南壁からは広島山の会が1992年7月に初登頂しています。周辺に有る羊満台山 5666m とプニュー山 5413m は外国隊が登頂しています。最も一般的に登頂されるのは大姑娘山 5025m で、海子溝の老牛園子 3800m から6時間位歩いて登頂できます。途中 4500m 位でキャンプする事も出来ます。最近、固定ザイルを設置して二姑娘山 5276m や三姑娘山 5355m も登頂されるようになりました。他にも 5000m 以上の多くの山が有りますが、昨年からの登頂ラッシュが始まっています。

4800m 位までの山腹には多くのヤク道や岩羊道が有り、大部分について容易に跡を辿れます。日隆の町から長坪溝や海子溝の BC までの行程は歩いて半日 ~ 1日です。荷揚げには馬を使います (以前はヤクを使っていました)。日隆の町から双橋溝の BC までの行程は自動車です。双橋溝では馬を使えません。

四姑娘山の山域には登山家にとって魅力的な山や岩壁が多く有ります。また山上の美しい海子や花畑を巡りながら、これらの山や岩壁を眺める山歩きは、四姑娘山における最高の楽しみ方の一つです。



アフリカ生活に慣れてきた頃、“サファリ”へ出かけた。車で、動物のいる国立公園を駆け巡るあれである。動物園では見られない野生動物の野生の姿を見られる機会とあって、とてもわくわくして出掛けた。“サファリ”はスワヒリ語で、“旅行”を意味する。確かにその広さは、旅行と呼ぶのにふさわしく、ただただ広いサバンナが続く平原を柵で囲い、人間との居住区を分け、その中を車で駆け抜けるというものだ。

ケニアには全部で50の国立公園と国立保護区があり、中でも一番歴史があるのがナイロビ国立公園である。首都ナイロビの目と鼻の先にあり、車で20分も走ればその入り口にたどり着くことが出来る。野生動物ごしに、ナイロビの町並みを写真に収めることも出来る近さだ。私は、このナイロビ国立公園とナクル国立公園の2ヶ所を訪ねた。

“動物は、どんなだった？”

“どんな動物がいるの？”

“キリンはどのくらいの背の高さなの？”

“サイはどのくらいの大きさなの？”

動物見学旅行から戻った私は、子供たちから質問攻めにあった。「えっ？」と思った。車で行けばすぐそこにあるたかさんの国立公園。私にしてみれば、千葉に住んでいて東京ディズニーランドへ行ったことがないという感覚に近いのかなと、考えていた。近すぎる故にいつでも行けるから行ってないだけのことだと。しかし暫く経ってみると、私のサファリの話共有できるのは、私の周りにいるケニア人には一人もいなかったのである。もちろん、その他のケニアに住む日本人を含む外国人とは、どこかのサファリで、こんな動物を見たとか、ガイドが良かったとか、話が弾むことはたくさんあった。

ケニア人を含めアフリカ人にとって野生動物とは？国立公園とは？ そんな疑問が浮かんだ。国土の10%をも占める公園の広さ。その自然の豊かさ。外国から来た旅行者を圧倒的に魅了するその自然。しかしそれを保有するアフリカ人と、そこを訪ねる外国人とは考え方に違いがあることが分かる。

まず、地元のケニア人はサファリに行かないのか？行けないのか？答えは、行けないけど、行きたいと思わないではないだろうか？まず、足がない。国立公園の入場は、四輪駆動の車しか入場できない。車を持っている、しかも4WDを持つ地元ケニア人はどれくらいいるのか？ほとんどいない。次に、メンバーズカードを作らなければいけない。このカードはどこかのナショナルパークでも共通であるが、



ナショナルパークの入り口

最初に会員費を納めなければいけない。そして入場料は、ケニア人と外国人で違っている。日本円にしてみれば安く感じるとはいえ、地元の人にとっては決して安くはない。つまり、①4WDの車を持つ人、チャーターできる人、②メンバーズカードを作るお金のある人、③入場料を払える人となるとほとんどが外国人に限られてくるのである。

そして驚いたのが「なんで動物見たいの？」という素朴な疑問である。「なんで、かな？」と私は返事にとっても困った。子供の頃より遠足などで動物園に行き、動物を見てわくわくしたのを覚えている。しかも野生動物を、折の中に入っていない動物を近くで見ることができる。「好奇心」以外の何者でもない。実際、キリンが群れで歩いてくる姿がまるで電信柱が規則的に自分の方に向かってくるようでどきどきしたこと、学校の教室ほどの大きさのサイのお母さんが、子供を守ろうと威嚇してきたときの恐怖、ガゼルの群れが車に驚いて逃げていくときの美しくジャンプするうしろ姿、フラミンゴが一齐に飛び立っていくその音。外国人観光客の心を打つ衝撃的で感動的なシーンである。吹き抜けるサバンナの風に吹かれながら自分も自然の一部であることを実感できる感動的な時間である。

でも、それはまさに「私たちににとっての」感動であり、喜びなのである。だから、「何で動物を見たいのか」という問いにはアフリカ人にとっては「変わってるね〜」という感情も多少は含まれているように思う。その感情の背景には、野生動物は恐ろしい存在という認識がある様に思う。国立公園と人間の移住地を分けるのは、鉄製の柵である。問題は国立公園ではないところにも、野生動物は生息していることだ。私も、歩いていて何度かガゼルの群れやダチョウが走っているのを見かけたことがある。(ナイロビの街中ではないが)





ナクル国立公園のサイ



ナクル国立公園のフラミンゴ

アバディア国立公園の近くに畑を持っていた旦那のおじいさんの話に聞いたことのある話がある。夜、バナナの木が大きく揺れ、倒されていく音を聞いたおじいさんは泥棒かと思ひ斧を手に畑に出た。そこで見たのは、畑を荒らすメスの象一頭。おじいさんに気が付き、視線を合わせるために、かがむような姿勢をとってきた。目が合った。その恐怖は言葉には表せないという。ケニアが独立するとき戦士として戦ったこともあるおじいさんであるが、今でも一番怖かったことは、この深夜の象と遭遇であると言う。

アフリカの人にとって、野生動物は時に畑を荒らし、人をも襲う恐怖の対象でもあり同時に、観光客を魅了するサファリとしての外貨を稼ぐ手段。また、その肉や象牙を高値で売ることの出来る密漁の対象。動物を愛でて、野生はどのようなという感動の対象ではないことは私にとっては驚きではあるが、住んでいる人たちにとっては当たり前の感情であるのだろう。

さてナイロビには、野生動物の肉を食べさせてくれる政府公認の“カーニバル”という名前のレストランがある。そこでは、シマウマ、インパラ等野生動物の焼肉が食べられるらしい。私も一度は訪ねてみたかったのだが、周りにいるケニア人の友人は誰も私の誘いに乗ってくれなかった。

「なんでそんな肉食べてみたいの？ 牛肉やヤギ肉が一番おいしいって！」

見たことがなくても、食べたことがなくても興味がないケニア人。今、知っていること、食べているものがベストだと信じている姿。一方、外国人の、何でも知りたい、聞きたい、食べてみたいという欲求は確かにケニアを観光大国にした。

外貨を稼ぐ手段として政府もその運営・保全に力を入れている。また観光業で生計を成り立たせているケニア人も多く、日本語を始めいろいろな外国語を自由に操るガイドも多い。

ただその反面で、自然と人間のお互いに干渉しない関係が外からの圧力で崩れてきたのではないかと思わざるを得ない。希少な象牙、鉱物資源、森林、野生動物。知らないものを知りたいという好奇心は、それとの調和をどんどん奪ってゆく。しかも、ケニア人ではない手で。しかし、それらは彼らにとっては外貨を約束してくれる。「経済と環境の調和」の問題は、資本主義が抱える世界中どこにでもみられるありふれた問題ではあるが、これからも手付かずだった自然がアフリカからも消えていくことに何も感じないというわけにはいかない。

ただ、「経済よりも環境を優先しよう」という声は、衣食住が足りている先進国の声であることが多い。先日ディスカバリーチャンネルの、ある番組で、西アフリカのカメルーンを扱ったものがあった。首都のあるレストランは、伝統料理であるゴリラの肉を使ったシチューを出している。しかし、政府は野生動物の肉を食べることを廃止しようとしている。理由は、旧植民地政府であったフランスにある環境団体が「野生のゴリラの数が減っていることに憂慮しての措置であり、保護していこう」ということである。

ゴリラを代々捕獲してきたある部族の村人は、「ゴリラは増えすぎると森林に餌がなくなり、周辺の田畑を荒らすようになる。それを防ぐためには、食肉用として殺すことを伝統的にしてきた。」そのフランスのNGOの職員はこの村に入り、「いかに野生動物を保護していくのが大切か」を村人に説いている。しかし、作物を荒らされた村人は訴える。「唯一の畑の食べ物がゴリラによって荒らされた。どうやった子供を食べさせればいいのか？あなたはそれを教えてくれない。」

アフリカの人々は、自分たちの方法で自然環境と調和してきた伝統と歴史がある。そうするには理由があるのだ。衣食住を満たされた先進国の人々が、美しい価値観を押し付けてはいけないと思う。そもそも先進国の豊かな生活こそ、途上国の資源・自然を奪うことで成り立っているものであるのだから。



## ‘わんりい’ 新年会、盛会でした！

2006年2月4日(土) 於：麻生市民館料理室

‘わんりい’新年会が開催された2月4日(土)は、鍋料理には願ってもない程寒い日でした。が、お天気に恵まれ、日頃なかなか顔をあわせられない懐かしい面々や会の関係者の皆様等総勢40名が次々お出掛け下さって、‘わんりい’新年会の恒例のメニュー「シュワンヤンロウ」(羊肉のしゃぶしゃぶ)に舌鼓を打ちました。

軽くお湯をくぐらせた薄切りの羊肉に、複雑で奥深い味わいのシュワンヤンロウ用の特別なタレをつけて口に放り込む、その一口目の感動的感激的な美味しさ！こんな複雑な味わいを発明した中国の食文化に脱帽です。この美味しさを毎年、毎年、新年会のたびに再確認し、来年の新年会も頑張るぞーと決意を新たに‘わんりい’の活動が13年を超えたといってもいいくらいです。中国のシュワンヤンロウのチェーンの大手が日本進出を決めたという記事(別枠右下掲載)が朝日新聞に掲載されましたが、‘わんりい’の新年会は質と量と値段で安心して食べられる老舗です。

ところでこの特製秘伝のタレは、シュワンヤンロウの食べ方と共に、在日の京劇俳優として活躍の殷秋瑞さん自らが作って見せてくださり、‘わんりい’に教えてくださいました。

メインになる素材は、芝麻醤というゴマとピーナッツを合わせてペースト状にしたもので、このベースに水を加えて緩めてゆくのですが、これが一筋縄では行きません。初めはゆるゆるですが油分が多いので水を少しずつ加えてかき混ぜているうちにまるで粘土を捏ねるように重くなってしまいます。更に水を少しずつ加え、同方向に頑張っけて混ぜているうちに粘土の塊が段々乳化して行きます。40人分のタレともなります大変な力仕事で、毎年‘わんりい’の男性会員達がタレ作りで格闘しています。今年は、3人がかりで一時間、美味しいものを頂くのは執念が要るということでしょうか。

さて、用意された10kgの羊肉が参加者のお腹にきれいさっぱり収まった後は、何媛媛さんの古筝の演奏、「中国語で歌おう」会のメンバーが「大海呵、故郷！」を歌い、参加者一同も合唱し、ビンゴと福笑福引でなごやかないいムードでお開きになりました。

‘わんりい’関係者としてご参加くださいました皆様は、赤



「大海呵、故郷！」を披露する「中国語で歌おう」会のメンバー達



中国琴を演奏する何媛媛さん

岡健一郎(日本スリランカ武道交流協会代表)さん、<sup>wu wan xin</sup>吳万新(趙鳳英さん 夫人)さん、<sup>wu li wu sha</sup>烏里烏沙(NPO法人ゲーサンメド理 事長)さん、<sup>he yuan yuan</sup>何媛媛(‘わんりい’何媛媛 来信のコラム担当)さん、チ・ブルグッド(馬頭琴演奏者/万馬東京馬頭琴教室指導者)さん、<sup>zhao feng ying</sup>趙鳳英(‘わんりい’中国語で歌おう)会講師)さん、永瀬征雄(万馬東京馬頭琴教室世話人)さん、野島徹太郎(つるかわ水墨画を楽しむ会世話人)さん、<sup>han xin</sup>韓鑫(何媛媛さん夫君)さん、<sup>man bai</sup>滿柏(中国画家/つるかわ水墨画を楽しむ会指導者)さん等の皆さん。(アイウエオ順)そして、留学生はハワイから桜美林大学に留学中のランダルさんが参加くださいました。(田井)

牛しゃぶもいいけど...

## 羊肉しゃぶ 日本へ進出

【上海—山口博敬】本場・中国の「羊肉しゃぶしゃぶ」大手チェーンが日本に進出する。自動車保険などの見積もりサイトを運営するウェブクルー(本社・東京)は今月、中国で約700店のしゃぶしゃぶ店を運営する「内蒙古小肥羊餐飲連鎖」(同・内モンゴル自治区包頭市)と都内に合弁会社を設立し、3月にも都心に1号店を開く。年内に3店舗を増やす予定だ。「鮮羊肉」と呼ばれる羊肉しゃぶしゃぶは、熱いスープに

くぐらせた薄切りの羊肉を、薬味を添えたゴマだれで食べる。特に北京周辺で人気だ。小肥羊は99年、包頭市で創業。北京や上海、広東省ほか中国全土に店舗網を及び、ケンタッキー・フライドチキンに次ぐ中国第2位の外食チェーンに成長している。ウェブクルーは小肥羊の日本法人「小肥羊ジャパン」の資本金約1億円のうち37.6%を出資。関東を中心にフランチャイズ加盟店を増やしたいという。

本場・中国の大手チェーン

2006年1月13日 朝日新聞記事抜粋



ジャンシャオチン  
中国古筝演奏者・姜小青リサイタル

～ 今日までそして、これから～

音楽監督・ピアノ：城之内ミサ ゲスト：賈鵬芳(二胡)  
サポートメンバー：高桑英世(フルート)/永島広(ギター)  
/四家卯大(ベース)/馬平(パーカッション)

2006年3月13日(月) 19:00開演

於：東京文化会館小ホール

JR山手線上野駅公園口前

参加費：5000円(当日：5,500円)(全席指定)

申込み&問合せ：東京労音

03-3204-9933

能楽堂に草原の風が吹く

モンゴル馬頭琴 コンサート

2006年3月26日(日)

14:00開演(開場:3:30)

於：川崎能楽堂(JR川崎駅より徒歩7分)

<http://www.city.kawasaki.jp/sisetu/nogaku.htm>

参加費：2,500円(全席自由)

出演：セーンジャー(馬頭琴)/大和田りつこ(元NHK歌のおねえさん)(歌・語り)/他

曲目：スーホの白い馬(演奏、歌、語り)/ジュスレー/草原  
情歌/竹田の子守唄/花/さくら/私のふるさと/他

申込み&問合せ：NPO法人市民文化パートナーシップかわ  
さき事務局 TEL:044-8221-8107(9:00～12:00、  
13:00～16:00 土日祝休) FAX:044-221-8108

\*申込みは上記事務局へ、名前、住所、電話番号、枚数を連絡。  
当日受付にて支払い、チケット受け取り。

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を！

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。使用済み古切手も、沢山集まれば、1kg単位で現金化することができ支援金として使用されるとのことです。

小さくて軽い切手を1kg集めるには多くの方の協力が必要です。'わんりい'の会事務局も、古切手収集の窓口として協力しています。日本の切手、外国の切手など、周りを1cmほど残して切り取り、おついで折に'わんりい'の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。

チャンリン ヤンチン  
張林=揚琴リサイタル

～ 不思議な音の玉手箱～

2006年3月31日(金)

19:00開演(開場18:30)

於：池袋・自由学園明日館講堂(重要文化財)

<http://www.jiyu.jp/>

JR池袋西口/メトロポリタン口より徒歩5分

JR目白駅より徒歩7分

参加費：●一般4,000円(当日4,500円)

●学生・シルバー 3,500円(当日4,000円)

申込み&問合せ：(中国音楽勉強会) 03-3428-0600

E-mail:[jfkando@nifty.com](mailto:jfkando@nifty.com)

第2回 東アジア海文明フォーラム

「東アジアにムギをもちたらしめた人びと」

報告者：イディリス・アブドゥラスル氏  
新疆文物考古研究所

コメント：井上隆史氏

NHKエグゼグティブディレクター・  
総合地球環境学研究所客員教授

通訳：黄曉芬氏

東亜大学総合人間・文化学部教授

3月3日(金) 16:00～18:00

於：学習院大学 西2号館301教室

\* 入場無料・申し込み不要、詳細は下記へ。

● 学習院大学アジア研究教育拠点事業事務局

☎03-3986-0221(内線5743)

● 学習院大学 東洋文化研究所

☎03-3986-0221(内線6360)

'わんりい'のおたより会員継続のお願いとお誘い

年会費：1500円 入会金なし

郵便局振替口座：0180-5-134011 'わんりい'

'わんりい'は、「それぞれの国や民族が長い歴史の間に培った、それぞれの文化を知り、市民レベルでの国際友好活動を目指している市民ボランティアの会です。日本に外国の方々が増え始めた1992年より、主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催したり、2月と8月を除いた年10回、会報'わんりい'を発行しています。

毎年、4月は新年度のおたより会費納入の月です。おたより会費は、おたより制作費と送料及び活動のサポートに当てられています。今年もご継続くださいませ、と一緒に楽しい活動を展開していただければと願っています。

また、'わんりい'おたより会員への新規申込みをいつでも歓迎しております。活動の様子はおたより又は'わんりい'HPでご覧いただけます。

'わんりい'のおたより会員に申し込まれますと、会報送付の他、一緒に活動される仲間として、'わんりい'の全ての活動に参加できます。

問合せ：TEL/FAX：042-734-5100'わんりい'事務局へ